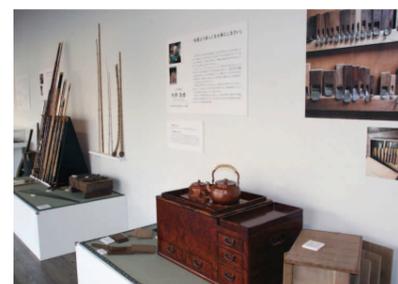


まち×匠×アート

2011年10月6日～11月20日 川口市立アートギャラリー・アトリア ほか



ものづくりのまち・川口に息づくさまざまな文化や歴史をアートの視点で再発見していたがごとく、川口を象徴するアートスペースでは空間を活かした多彩な展覧会やイベントが開催されました。



川口市立アートギャラリー・アトリアでは10月6日から11月20日にわたり、ギャラリー5周年記念事業の第二弾として「川口の匠」展を開催しました。川口の匠たち12人の活動取材した本『川口の匠』を出版したほか、展覧会では道具や作品、仕事風景写真、匠たちの言葉などを展示・紹介しました。卓越した技から生み出される作品はもちろんのこと、思考の柔軟性や仕事に対して真摯に向き合う誠実な人となり、ものづくりの真価と美を感じることができる展覧会でした。出品者は、飯塚深(額縁製作)／大淵浩吉(江戸指物師)／尾林弘一(植木職人)／川澄昌国(刃物師)／竹脇榮九郎(美術鋳物師)／西耕三郎(染め師)／半屋春光(からくり人形師)／松下喜山(錫師)／宮塚文子(パービーのドレス制作)／山野正幸(和竿職人)／吉澤広寿(造形物制作)／渡邊政雄(金属加工)の方がたです。

また、SMFではアトリアとの協賛事業として、この「川口の匠」展に関連した次の三つの催しを実施しました。

工場と銭湯 —川口へのオマージュ

会場：KAWAGUCHI ART FACTORY
10月5日～10月10日

川口のまちを象徴する工場と銭湯。昭和44年の最盛期には鋳物工場だけでも556、銭湯は約70あったと言われています。金子良治さんが代表を務めるKAWAGUCHI ART FACTORYも、そのひとつです。本展では、昭和30～40年代頃の工場や銭湯の写真や当時の住宅地図などを展示し、その変遷を振り返りました。また、川口の銭湯のペンキ絵を手掛ける中島盛夫さんの作品展示や、町田忍さん(庶民文化研究家)を講師に



むかえた関連イベント「銭湯のあるまち歩き」を開催し、川口のノスタルジックな一面を体感できる貴重な機会となりました。

人と自然とのコミュニケーションの調和を「工場」と「銭湯」、そして「職人」から見ることができ、未来に受け継いでいきたい文化についても改めて考えさせられました。(入場者数：63人[関連イベント参加者：20人])

未来の靴 —モノ・ヒト・コト

会場：GRENSTOCK
11月4日～11月19日

靴生産の歴史の長い地区にある靴工場で開催した展覧会。アート関係者23名に、未来にあって欲しい(あるであろう)「靴」を自由にイメージして描いていただきました。その中から靴職人の五寶賢太郎さんによって選ばれた5足が実際に制作され、それらを展示しました。

関連イベント「靴トーク」では、実制作するにあたってのエピソードや形と素材の関係など、



普段はあまり聞くことができない靴を基点にした議論が展開されました。生活習慣や環境によって素材や形が変化している中、モノとヒトの関係を通して未来について考えさせられる展覧会となりました。(入場者数：103人)



しあわせを運ぶ人形たち

会場：masuui R.D.R gallery
11月8日～11月20日

築50年の公団の一室にあるギャラリーで、「パービー」「津軽こけし」「市松人形」「ルビータ」「からくり人形」など、各国の文化や世相を鮮明に映し出す人形を展示しました。形状や素材の違い、時代背景について紹介しながら、今も人形制作に携わるつくり手の方がたを紹介し、つくり手の視点からも鑑賞していただきました。

関連ワークショップ「メキシコの伝統人形「ルビータ」をつくろう」では、講師のカロリナ・



エスパラゴさんにメキシコの文化を学びながら伝統的な手法で人形を制作しました。人形離れが進む今、人びとが人形に込めた想いを身近に感じていただけたのではないかと思います。(入場者数：112人[ワークショップ参加者：18人])

〔出展協力〕カロリナ・エスパラゴサ(アーティスト)／宮塚文子(パービーのドレス制作)／半屋春光(からくり人形師)／福田東久(日本人形師)／津軽こけし館／佐藤悠一(black stone city)／NPO手をつなぐメキシコと日本 ※敬称略

今村香織(SMF運営委員)

